同朋大學佛教文化研究所報

第33号

発行日　令和二年三月三十一日
編集・発行　同朋大学佛教文化研究所
代表者　安藤　弥
〒四五三-八五四〇
名古屋市中村区稲葉地町七の一
TEL〈〇五二〉四一一―一三七三
FAX〈〇五二〉四一一―一三六九
e-mail：bc-inst@doho.ac.jp
（題字は池田勇諦元学長）

研究所と共に歩んだ四十年

客員所員　青木　馨

約四十年にわたり、仏教文化研究所と共に歩ませてもらった。自坊住職だけの人生であったなら、決して得ることのできない多くの出遇いと経験を研究所において蓄積できたように思う。二〇一八年に大谷大学より学位を取得できたのも研究所あってのことであった。私は六十五歳となった今年度末、一つの区切りを迎える（別科非常勤講師を定年退職）。所報の巻頭言に若干の思いを記させていただきたい。

研究所は、広く仏教文化を研究課題とするとはいえ、開所以来、その中心軸は一貫して、真宗寺院史料の調査研究にある。現在、真宗史料を専門的に扱う研究機関は、本願寺史料研究所と当所だけではないだろうか。ただし、前者は西本願寺に襲蔵される史料群の研究を中心としている。したがって、当所は全国の真宗寺院の法宝物・史資料を専門的に調査研究する全国唯一の学術機関ともいえる。そして、全国の同学の研究者とも密に関係を築いてきた結果、多くの業績を学界に提供してきた。

毎年度一回刊行する『紀要』・『所報』のほか、研究所の編集で、次のような多くの研究書がある。すなわち、同朋大学仏教文化研究所　研究叢書Ⅰ『蓮如名号の研究』（一九九八）、同Ⅱ～Ⅴ『実如判　五帖御文の研究』（一九九九～二〇〇三）、同Ⅵ『史料　大浜騒動』（二〇〇三）、同Ⅶ『蓮如方便法身尊像の研究』（二〇〇三）、さらに論集『誰も書かなかった親鸞』（二〇一〇）、『教如と東西本願寺』（二〇一三）といずれも法藏館より刊行した。私も直接、間接にお手伝いした。それぞれに思い出深いものがある。これらはまさに研究所の金字塔である。また、毎年度二回の史料展示を行い（二〇〇五年後期～）、図録の作成も貴重な成果である。

真宗教団は、もともと典型的な在家仏教で、門徒集団を単位として、道場化・寺院化が進んだ。したがって、寺だけでなく門徒宅にも質の高い法宝物や史資料を伝えている場合もある。このため幅広い情報網が必要となってくる。こうした点からも、人的交流は欠かせず、研究所はその核となる役割も荷ってきた。

さらには、現在は減少したが、有用な実物資料の購入や書物などの寄贈を受け、研究所の財産になっている。これらは研究に資することはもちろんのこと、博物館学の教材ともなる。購入予算削減は、こうした研究環境の縮少につながることが懸念される。当初より研究所が築き上げた伝統は、活字や写真に紹介されていても実物にあたる基礎作業重視にある。調査に携わることは、一種の職人的要素を実感する。鑑識眼と史料的価値判断、古文書解読などのキャリアが要求され、人材育成には時間を要する。できるだけ後進に伝えておきたい。

そして、長期に集積された写真データや調査記録の情報発信は、研究所の責務であり、「アーカイブス」事業が進められているが、今後のためいっそうの奮起が必要である。研究スタイルは変わっても、足と眼であつめられた情報は永遠に研究所の大きな財産である。研究所の未来にエールを贈り続けたい。

〔史料寸考〕船場本徳寺『御堂日記』（享保三年）について

安藤　弥

ここで寸考し、部分的に写真で紹介する史料は、真宗大谷派姫路船場別院本徳寺（兵庫県姫路市）に所蔵される『御堂日記』のうち、享保三（一七一八）年と確定できるに至った一冊（縦三〇・五㎝×横二〇・八㎝）である。

『御堂日記』とは、本山東本願寺や各地域の御坊（別院）の本堂（本山の場合は御影堂・阿弥陀堂）における日々の儀式の内容やその担当僧侶、各種荘厳等を記録したものである。いずれにおいても、現在に至るまで、よく記し続けられている（注1）。

船場本徳寺には、推定六〇冊を超える江戸時代の『御堂日記』が残されている。二〇一〇・一一年に実施した史料調査において現状が確かめられ（注2）、それ以降、断続的な調査作業の中で、詳細な整理が課題となっていた。

特に、船場本徳寺の現本堂が、これまで享保三年の再建とされていながら、その根拠となる同時代史料は見出されておらず、同年の『御堂日記』の発見が期待されていた（注3）。何かしらの記述があるものと考えられたからである。しかし、はっきりと享保三年のものとわかる完全本はなく（冊子として状態がよく表紙に年時が明記されているものもあれば、綴じが外れ、ばらばらになっているものも多く残されている）、調査は難航した。失われている可能性も考えられた。

そうしたところ、二〇一八年八月八～一〇日に実施した調査（注4）で、ついに享保三年の『御堂日記』を見出すことができた。年時不明や端本となっている『御堂日記』の数々を精査し続けたところ、別々になっていた後欠（A）と前欠（B）の二冊がつながることが判明したのである。

まず、表紙（①）が擦り切れ年時情報の読み取れない後欠（A）の末尾が三月十二日条の途中で切れ（③）、前欠（B）では三月十三日条とその前が記されており（④）、つながると判断できた。

そして、（A）の二月二十三日条に深広院の一周忌が記されていた（②）。この深広院は、『大谷嫡流実記』（注5）によれば、東本願寺第十四世琢如の十四男常智晴含で、船場本徳寺第七世演慈院琢玄瑛白（琢如五男）の弟にあたり、享保二年（一七一七）に没している（琢玄の弟である縁により一周忌が船場本徳寺でも勤められたのであろう）。よってこの（A）は享保三年のものと判明する。

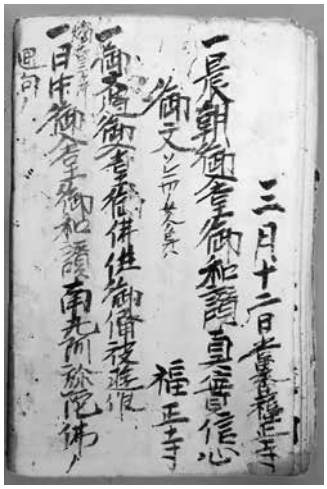
次に、（B）の五月二日条に「新御堂江御入仏諸式如別記」（⑤）、また「御遷座御法会之規式」（⑥）とあって法会次第が記録されていた（演慈院琢玄の出仕が確認できる）。「諸式、別記の如し」とあるから、他に詳細な記録が作成されたのであろうが、それはなお残念ながら未確認である。また、その前後に関連記述がないか調べたが、これもまた残念ながら見出すことはできなかった。地道な調査作業は今後も続く。

とはいえ、さしあたり、以上のことから、（A）（B）を合わせて船場本徳寺における享保三年の『御堂日記』であることは明らかであり、さらにこれが同年に船場本徳寺の本堂が再建され、新しい御堂への入仏・遷座の法会が勤められていることを明証する文献史料であることは間違いない。

このささやかながら大切な成果を、二〇一八年十一月十四日（水）～十一月二十九日（木）の会期で、真宗大谷派山陽教区同朋会館講堂3を会場に行われた真宗大谷派姫路船場別院本徳寺・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌事業「船場御坊の四百年―別院本堂三百年・修復に向けて」展で披露することができた（筆者も特別協力）。しかし、図録等の作成は行わなかったため、ここにあらためて寸考を提示する次第である。

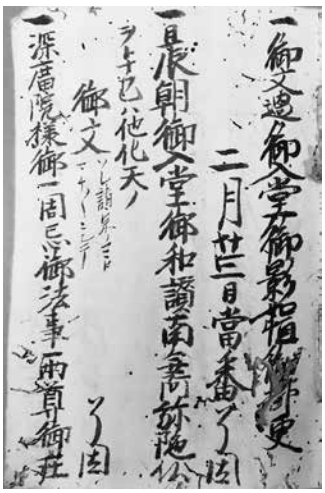
船場本徳寺の本堂は、享保三年の再建より三百年の歴史を有し（ただし、痛みも激しいため、このたびの修復事業が重要である）、現存する貴重な木造建築文化財として高く評価されるべきものと考える。

①（A　表紙）



③（A　三月十二日条）

⑤（B　五月二日条）



②（A　二月二十三日条）

④（B　三月十二・三日条）

⑥（B　続・五月二日条）

（注1）たとえば、東本願寺においては慶長五（一六〇〇）年から現存し（『教如上人　東本願寺を開かれたご生涯』、東本願寺、二〇一三年）、真宗大谷派名古屋別院においても、創建当時（元禄年間）から現存している（『名古屋別院史』、真宗大谷派名古屋別院、一九九〇年）。

（注2）この一連の調査とそれに関わる活動については、青木馨・安藤弥・松金直美「【特別活動報告】特別企画展「船場御坊の四百年」」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十一号、二〇一二年）を参照のこと。また、兵庫県立歴史博物館で二〇一四年に行われた特別展『播磨と本願寺―親鸞・蓮如と念仏の世界―』も関連事業である。

（注3）現在進められている修復に伴う調査で、本堂屋根裏から享保八（一七二三）年の墨書を持つ木板が発見されたが、これも貴重ではあるものの、享保三年再建を確定づけるには残念ながら至らない。同木板も「船場御坊の四百年―別院本堂三百年・修復に向けて」展（実施概要は本文中に記述）で展示された。

（注4）調査実施にあたっては、日比野洋文氏（本研究所特別研究員）ならびに、老泉量氏（大谷大学大学院博士後期課程）、斎藤聖氏（本学大学院博士前期課程）他一名の協力を得た。また、船場本徳寺の関係者各位には、いつも史料調査のご許可をいただき、あたたかなご対応をいただいている。記して甚深の感謝を申しあげる。

（注5）『真宗史料集成』第七巻「伝記・系図」（同朋舎出版、一九八三年）六五六頁。

〔史料寸考〕『名古屋東御坊御大法会之図』について

千枝　大志

本年度前期の史料展示『空間にみる名古屋の寺院と城下町のカタチ』（千枝担当）の準備作業の中で、古書店から千枝が購入した「名古屋東御坊御大法会之図」と標題のある名古屋東御坊（現真宗大谷派名古屋別院）本堂で天保十四年（一八四三）に執り行われた法要「御大法会」の様子を描いた木版摺一枚（縦三五・四糎×横四七・三糎）を少し詳しく紹介し寸考したい。この摺物の上段には、法要の概要が記されており、下段には本堂内での執行の様子が空間的に描かれている。

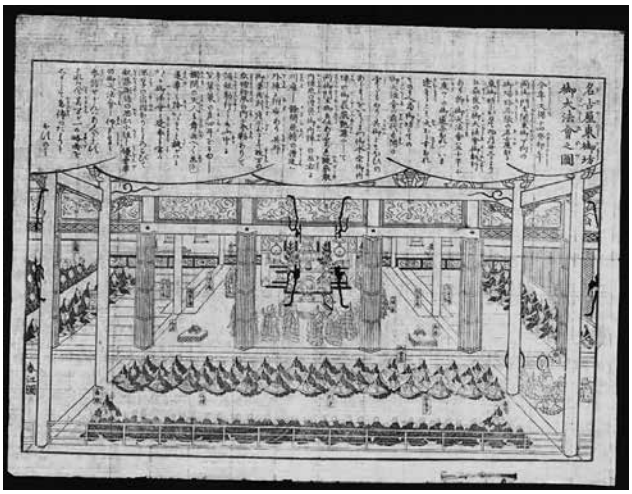
また、袋（縦一七・四糎×横一一・六糎）の表側には、大法会に不参加の人々にもその盛大な様子がつぶさにわかるように詳細に本堂の内部空間を描いた旨の宣伝文があるように、本図は、簡略化されたイラスト的な描写でありながらも特徴を良く捉えた写実的な構図となっている。

この図を描いたのは、「春江図」と本紙や袋にあるように、尾州の地誌『尾張名所図会』の挿絵を描いたことなどで知られる尾張藩士小田切忠近である。また、この図の袋裏側から、名古屋の書肆四名（昭華堂・本屋久兵衛・味岡久治郎・本屋善助）が版元であることがわかる。特に本屋久兵衛こと、菱屋久兵衛は『尾張名所図会』の出版にも関与しているが（『名古屋の出版―江戸時代の本屋さん』名古屋市博物館一九八一年）、『尾張名所図会』には東御坊の本堂は概観のみ描かれ内部の描写はないため、本図の発行の意図には同図会の内容を補完する含意も込められていた可能性がある。ともかく、本図以外に本堂の内部空間を描いた史料は管見の限りでは他に類例を見ないため貴重である。

では、この「御大法会」とは何かを考えると、『名古屋別院史　通史編』（真宗大谷派名古屋別院　一九九九年）の「名古屋別院史年表」の天保一四年九月二十三日条には「名古屋御坊親鸞聖人五百五十回忌（六昼夜）はじまる」とあることからも、名古屋東御坊で執行された親鸞聖人五百五十回忌を指していることは間違いないが、本図上段の解説にあるように浄土真宗東西門跡の関東御下向の帰路に特別に執行された法要であった。

以上、「名古屋東御坊御大法会之図」の解題を記したが、紙幅の都合上、詳細な検討、とりわけ天保十四年の親鸞聖人五百五十回忌についての検討は別稿としたい。

なお、これ以降、「名古屋東御坊御大法会之図」の写真や本文や注記等の翻刻文を掲載するが、翻刻に際して、適宜、漢字を通行体に改めた。また、改行は「／」で表現した。



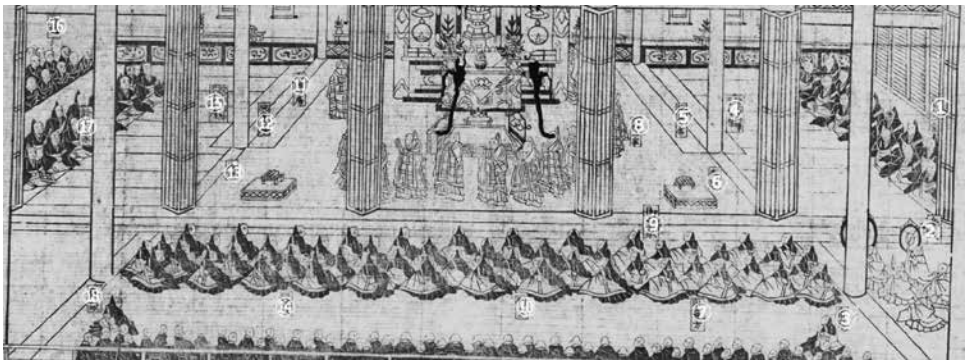
（本紙写真）

（本紙上段部分翻刻文）

「名古屋東御坊／御大法会之図

今年天保十四癸卯年／両御門主関東御下向の／御帰路尾張の名古屋なる／東御坊におゐて九月廿三日より／五昼夜の御大法会御執行／あり抑御大法会ハ五十年に／一度ツ、の御遠忌なれバいま／逢奉るこそ大なる幸なれ／そのうへ当御坊にての／御大法会ハ前代未聞の／事どもなり其御よそほひの／あらましをいはゞまづ御本堂御内／陣の御荘厳艶麗にして／両御門主御出仕あらせられ院家衆／内陣衆の僧侶ハ御内陣の左右に／列座し餘間飛檐の僧達ハ／外陣に附座あり其外／御堂衆列座に至るまで数万の／衆僧結界の内に参勤ありて／誦経勤行し給ふ中に／笙篳篥の声心耳をすまし／欄間の天人も舞出べく画きし／蓮華も降かゝるかと疑がハる／かゝる御法会に逢奉る事ハ／深厚の宿因なりとよろこびて／報恩謝徳の思ひに住し優曇華／の御大法会と仰ぎ尊ミ／参詣せずんハあるべからず／されバ今其万が一の略図を／しるして想像のたよりと／なすのミ」

（本紙絵図部分の注記箇所）



（本紙絵図部分の注記箇所翻刻文）

①餘間一家　②楽人
③番衆　④院家内陣こぼれの席
⑤院家の席　⑥御座
⑦助音方　⑧内陣一家
⑨御堂衆　⑩列方
⑪内陣の席　⑫院家の席
⑬御座　⑭役僧
⑮院家の内陣こぼれの席　⑯飛檐
⑰餘間一家　⑱番衆
※全ての注記は長方形で囲われている。

※1　本紙標題部分の一部に魁星印の朱印が捺されている。
※2　本紙絵図部分左下に「春江図」と注記がある。
※3　本紙絵図部分中央及び左右端に少し虫損箇所がある。

（袋表写真）

（袋表翻刻文）

「御免／東御坊／御大法会之図／（朱印「春江図」）

此図ハ卯九月廿三日より五昼夜の間御遠忌御執行／の式を委しく画きさハりありて参詣なさゞる人／に御法事の大さうなるさまをしらしめんがためなり」

（袋裏写真）

（袋裏翻刻文）

「

版元書林　昭　華　堂

本町九丁メ　本屋久兵衛

宮町坂口　味岡久治郎

本町通門前丁　本屋善　助」

〔新刊紹介〕

川口　淳

◎安藤弥著『戦国期宗教勢力史論』（法藏館、二〇一九年）

〔目次〕

序論

第Ⅰ部　戦国期本願寺教団の儀式・組織

第一章　本願寺「報恩講」の始源――親鸞～覚如期・親鸞三十三回忌――／第二章　本願寺「報恩講」の確立――蓮如～実如期・「教団」形式との関係性――／第三章　本願寺「報恩講」の展開――証如期・「教団」構造との関係性――／第四章　親鸞三百回忌の歴史的意義（一）――顕如期・「報恩講」の変容――／第五章　親鸞三百回忌の歴史的意義（二）――「御遠忌」のはじまり――／第六章　戦国末・近世初期の本願寺「報恩講」／第七章　大坂本願寺の御堂衆をめぐって／第八章　大坂本願寺における「斎」行事／補論1　『顕誓領解之訴状』考／補論2　「権化の清流」は「霊場」へ――『反古裏書』に読む戦国期真宗僧の論理――／補論3　戦国期真宗僧の歴史認識――『山科御坊事并其時代事』から『本願寺作法之次第』へ――

第Ⅱ部　戦国期本願寺教団の社会的位置

第一章　中世の本願寺造営史――大谷・山科・大坂・天満――／第二章　戦国期本願寺「教団」の形成／第三章　本願寺証如『天文日記』について／第四章　戦国期の大坂本願寺教団と比叡山延暦寺――『天文日記』の検討を中心に――／補論1　本願寺顕如の誕生・継職／第五章　本願寺「門跡成」ノート／補論2　本願寺の脇門跡興正寺顕尊について／第六章　京都東山大仏千僧会と一向宗――戦国期宗教勢力の帰結――／補論3　「一向宗（衆）」について／第七章　本願寺教如の生涯と歴史的論点／第八章　本願寺教如の宗教活動と社会的位置

本書の総括と今後の課題／初出一覧／あとがき／索引

本書は、本研究所の所長を務める安藤弥教授の『戦国期宗教勢力史論』と題する大著である。著者の学位請求論文「戦国期宗教勢力論」（大谷大学）と擬講論文「本願寺報恩講の歴史的研究」（真宗大谷派）を統合し、大幅に増補改訂したもので、十七年にわたる研究成果のおよそ三分の一を一冊としたのが本書である。

筆者は名古屋大学を卒業後、大谷大学大学院、同大助手を経て、同朋大学に職を移し、本研究所の活動にも多年にわたり尽力している。筆者は、本書において本研究所の真宗史・仏教文化研究への取り組みや、また研究所関係者からの学恩に触れている。つまり本書は本研究所の活動にも深く関わる一冊なのである。

さて、本書の内容は目次の通りであるが、第Ⅰ部では、戦国期宗教勢力としての浄土真宗・本願寺教団における宗教儀式と組織体制の関係について、とくに「報恩講」という教団の中心法要の歴史的展開を論じている。まず、親鸞の時代から、『報恩講式』を撰述し親鸞の祖師忌として恒常的法要を整備した覚如期（第一章）、「報恩講」の名称と中心法要としての意義の確立がなされた蓮如期から儀式内容が強化された実如期（第二章）、そして本願寺住職（宗主）・一家衆・御堂衆といった教団内身分が確立したという証如期を論じる（第三章）。そして顕如期の親鸞三百回忌を詳細に検討して、特に教団内身分の動揺を（第四章）、さらに親鸞三百回忌という初めての本格的な「御遠忌」の諸方への影響を論じ（第五章）、最後に戦国末・近世初期の「報恩講」について触れている（第六章）。

第Ⅱ部は、戦国期宗教勢力としての本願寺教団の社会的位置が主題である。まず、本願寺が「教団」の本山寺院として整備されていく展開を論じ（第一章）、次に、蓮如の布教形態や実如による体制強化をとりあげ（第二章）、証如『天文日記』から大坂本願寺の社会的位置を考察し（第三章）、かつ大坂本願寺の門跡体制のなかでの社会的位置の上昇について論じる（第四章）。そして本願寺教団が門跡に勅許され公的認可を得た顕如期（第五章）、豊臣政権下の京都東山大仏千僧会に関する考察を行い（第六章）、最後に織田信長・豊臣秀吉・徳川家康らと同時代を生きた教如期本願寺教団を論じている（第七・八章）。

本書のタイトルが『戦国期宗教勢力史論』であるのに、なぜ《本願寺教団》が主要な議論なのかは、率直な疑問としてあった。しかし、その理由については本書を読むなかで、筆者の主張として、「戦国期宗教勢力史論は、河内氏の研究以外さして議論が蓄積していない。仮に河内氏の議論自体、それがどちらかと言えば法華教団研究から始まる筋道から生まれたものだとするならば、別の筋道からも吟味し議論を重ねていく必要があると考えられる。すなわち、戦国期宗教勢力の代表的存在として、法華教団と並びもう一つ挙げられる本願寺教団の研究から、戦国期宗教勢力史論へと展開する筋道が即座に想起されよう」（四六七～四六八頁）という第Ⅱ部第六章の文章が目にとまる。実はこの点が本書全体に通じる学術的背景であり、筆者の問題関心の中心といえよう。

ところで、本書の特徴の一つが、「報恩講」という儀式論にかける比重が非常に大きいことである。宗教勢力という問題を論じるのになぜそれが必要なのかは、すぐには共感しがたいが、実はそれこそが本書の独創的視点ではないだろうか。「教如は僧侶（宗教者）である。その活動の根幹には人びとへの教化がある。この点は従来、あまり注目されてこなかったが、検討が不可欠なのは当然である」（五六四頁）、これは本書後半の一文であるが、ここから読み取れるのは、宗教的活動の実像とその本質を探究することによって、かえって戦国社会のなかでの教団が明確になるのであり、さらにそれは従来の研究では不十分であったということである。

筆者は、「本願寺教団は、民衆が門徒として主な担い手（正式な教団構成員）となり、戦国社会において広域的に展開した。こうした門徒民衆からの救済を求める宗教的願望に、教学・儀式を整えて宗派・教団化し、応答した戦国期本願寺教団のありかたを、戦国期宗教勢力史論における根幹に位置付けて考えるものである。」（六〇七頁）とのべる。

このように筆者は、戦国期本願寺教団の位置づけを考察しているが、それを単なる勢力争いの構図のなかだけで考えるのではなく、見逃され

がちな、儀礼・儀式の宗教教団として確立していく本願寺であるという大前提を、勢力史のなかに落とし込んだのである。儀礼に基づく信仰共同体であるという大前提を丁寧に研究することにより、そのうえで戦国期の本願寺教団の位置を描き出す手法・構成となっている。宗教勢力、戦国期の教団の社会的位置を明確にするために、あえて、報恩講などの「宗教儀礼論」から展開するところが本書の特徴であり、筆者の重要な視点である。本書はそのような筆者のこだわった問題関心に基づく長年の探究の結晶であると理解されよう。

今後、筆者は真宗地域史研究、一向一揆研究、またそれらの成果を総合した戦国期宗教勢力史論の全体的議論へと進めるという。本書の続編刊行に期待したい。

◎青木馨編著『A級戦犯の遺言 ―教誨師・花山信勝が聞いたお念仏―』（法藏館、二〇一九年）

はじめに……青木馨
太平洋戦争とお念仏……花山信勝
一、東条英機の最期とお念仏
二、土肥原賢二の最期とお念仏
三、私のお念仏
A級戦犯者以外の処刑者とお念仏……花山信勝
解説……青木馨
一、東京裁判
二、東条・土肥原元大将の辞世
三、教誨師・花山信勝
四、七名の処刑と国民
五、おわりに
付録「花山メモ」
あとがき……青木馨

人生をいかにしてとげるのかという関心は、現代人が日常のなかで見失いながらも、心の片隅に存在している違和感である。しかし、時にそのことが急激に学びたくなる。評者は日常の違和感のなかでこの書を開いた。そしてすぐ読み終えた。それほど本書に現れる言葉は簡明で力強かった。それと同時に、本書は学術的史料的価値の高い翻刻などが添付され、一般書としても専門書としても有用な一冊と感じられた。

かつてA級戦犯である東条英機らの最期を教誨師として見送った唯一の日本人、花山信勝という人物がいた。本書は花山が最晩年に語った「太平洋戦争とお念仏」と題する講演記録と、青木馨氏の解説が主な内容で、さらに花山氏の肉声を記録したCD付きである。

花山の講演には、花山と東条との交流、そして東条が獄中で仏教や浄土真宗の教えに関心を深め、『仏説無量寿経』の願文などに感銘を受けて、思想的な《転向》を遂げていく姿が、刻銘に回想されている。また、東条の他にも、七名の処刑に際する最後の言葉が記されるなど、花山が見送った戦犯者たちの最後が臨場感を持って記されているのである。

東条は戦争を主導していた時ではなく、戦後獄中で仏典を熟読することで自身を内省した初めての時間が人生の最も豊かな時間であった。この事実は多様な価値観が渦巻く現代を生きる我々に、本当の豊かさとはなにかと問いかける事象として十分な出来事ではないか。

一方、この戦犯者たちは最後まで「天皇万歳」と天皇への崇敬を変えることはなかった。このような姿勢と真宗の信仰が彼らのなかでいかなる意味で共存していたのか。あるいは彼らは最終的に戦争を、そして自らをどう受け止めたのだろうか。その詳細を判断することは難しいことである。

現代において、戦犯者たちが教誨師・花山との出会いによって、人生の意義や思想信念について、根底から《転向》を遂げていった事実を知るものは少ない。本書が人々に広く読まれ、戦争と平和を改めて考える機会となることを切に望む。

《研究会活動報告》

アジア仏教研究会

武田　龍

開催日　4／25、5／17、6／17、7／22、9／30、10／21、11／25、12／12、1／30、2／27、3／27

参加者　玉井威・武田龍・宮崎保光・蒲池勢至・岩瀬真寿美

今年度は鳩摩羅什訳『妙法華経』「五百弟子受記品第八」まで読み進んだ。釈尊が富楼那尊者に授記する場面を描く章の重頌の中に、「自浄仏土」の句が三度出る。原文では、自らの国土を（svakam kṣetram）浄化する（vi-√śudh）という菩薩行の実践を言う箇所であり、浄土思想の発端を表す表現である。偈文では実践の進化によって、動詞は vi-√śudh から pari-√śudh へと接頭辞は変わり、国土の清浄性が強調される。そして末尾の偈では、「当得斯浄土、賢聖衆甚多」と「浄土」の訳語が現れる。原文では、kṣetra-varam（すぐれた国土）であり、浄化の完成した国土は「すぐれた」（vara）という形容詞だけで表現され、動詞 √śudh との対応関係はない。

『妙法蓮華経』（四〇六年訳出）と『阿弥陀経』（四〇二年頃訳出）は同じく鳩摩羅什による翻訳である。両経の訳語の使用状況を考えると、同時期に並行して翻訳されていたようであるが、翻訳の完成は阿弥陀経の方が早い。これは、経典の規模つまり分量の違いによるものであろう。阿弥陀経と法華経を手掛けた羅什が、なぜ無量寿経の翻訳に向かわなかったのか。阿弥陀経にはなぜ「浄土」の語は現れないのか。興味深いところである。

二〇二〇年一月、研究会員の宮崎保光氏が急逝された。前田惠學先生との出会いから仏教に関心をもつようになり、研究会には十年余り在籍して、工学博士ながら熱心に仏典の読解作業に取り組まれた。伝統的な漢文経典の書き下しに異を唱え、漢文の英語ロジックの読み方を提唱されたことが懐かしい思い出です。惜しい方が亡くなりました。

アジア仏教研究会分科会

玉井　威

参加者　玉井威・宮崎保光・庄司憲・寺本一美・岩瀬真寿美・中川剛

従前のアジア仏教研究会とは別に、さらなるアジア仏教・文化に関する研究を行いたいとの要望から、平成二十六年にアジア仏教研究会分科会が発足した。これまでパーリ上座部仏教の仏典『ミリンダパンハー』を、その和訳である平凡社東洋文庫『ミリンダ王の問い』を中心テキストとして、パーリ原文、漢訳『那先比丘経』、二種類の英訳を併せて用いて読み進めてきた。広く外部に開かれた研究会という会の性格上、この分科会には仏教学のみならず、真宗学、工学、心理学、教育学といったさまざまな分野の方が参加されている。今回、真宗学を専門とする参加者（庄司憲氏）からもたらされた、まさに研究余滴ともいうべき報告の一端を紹介し、この会の研究報告としたい。

テキストに、何故全知者であるブッダが、サンガ（教団）を破壊するデーヴァダッタ（提婆達多）の出家を許したのかとその全知性を問題とするところがある。提婆達多と言えば、殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧の三逆罪を犯した大悪人として有名だが、ここで庄司氏より、『大無量寿経』下巻に五逆罪について経文があり、またその経文中に「令和」の一つの典拠ともいうべき「言令不和」（真宗聖典七三頁）なる語があることが指摘された。元号「令和」はすでに報道されている通り万葉集巻五に典拠があるが、「令和」の新たな典拠として興味深い。後ほど詳細な報告がなされることを期したい。

真宗史研究会

安藤　弥

二〇一九年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第四〇回）

【日時】七月二十五日（木）一六時三〇分～一八時

【報告者】塩谷菊美氏（研究所客員所員）

【題目】「知識人にとっての「石山」合戦」

第二回目（通算第四一回）

【日時】二〇二〇年三月三日（火）一七時三〇分～一九時三〇分

【報告者】金山泰志氏（本学文学部人文学科専任講師）

【題目】「野依秀市の仏教雑誌とその対外観」

塩谷氏は、いわゆる「石山」合戦が近世以降の知識人において、どのように受容され表現されたのかという視点からの史料検討を提示した。金山氏は、野依秀市（一八八五―一九六八）に注目し、彼が発行し続けた『真宗の世界』の分析を中心に、その対外観の仏教的特色を検討した。

次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

「日本仏教の成立と展開」研究会

脊古　真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会（小島恵昭・大山誠一・黒田龍二・脊古真哉・吉田一彦・藤井由紀子）では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一九年一〇月一九日に研究会を、二〇二〇年二月一一日から一三日にかけて現地踏査を実施した。

研究会では、脊古の「箱根神社蔵「万巻上人像」をめぐって―僧形神像の展開―」、吉田氏の「鬼神と仏教―役優婆塞の孔雀王呪法をめぐって―」の二本の報告が行われた。研究参加者だけではなく、外部からの参加をも得て活発な議論を展開することができた。

現地踏査は東京都板橋区内に伝承される二箇所の田遊びの調査を中心として、関連する寺社の踏査、博物館等の見学を実施した。

「東アジア仏教思想史」研究会

市野　智行

開催日　5／14、6／18、7／16、9／24、10／31、1／16

市野智行・川口淳・井野優介・鈴木道彦・小谷峻介

本研究会は、今年度より明恵房高弁（一一七三―一二三二）の『一向専修宗選択集中摧邪輪』（『摧邪輪』）の研究を開始した。一年目として、テキストを『鎌倉旧仏教』寛永年間版翻刻とすることを確定し、その他のテキスト、訳注書や研究論文の収集分析を行いつつ、巻上を読み進めている。

そもそも明恵は栂尾の高山寺を中心に活躍し、華厳教学を復興し、かつ実践的な仏道者であったと知られる。明恵は、法然の死後開版された『選択集』の内容が本来の仏教に背く菩提心排除の思想であるとして、それに怒り直ちに『摧邪輪』を記した。それゆえに『摧邪輪』は菩提心を撥去する過失に多くの紙幅をさいているが、その論法はあくまでも法然が『選択集』の中で重視した称名行をそしらず、法然が仰いだ中国の善導の釈を丁寧に依用しつつ、法然の浄土観の誤りを批判している。

我々がこの『摧邪輪』の研究を開始したのは、この法然への明恵の批判がいかに親鸞の『教行信証』の思想展開と関連しているのかという問題関心からである。『摧邪輪』と親鸞との関係はすでに指摘されている

点もあるが、本研究会はそれらをさらに精査して読解を進めている。また現行の先行研究は、巻上に集中しており、中、下巻は、近年中巻の訓・註 試稿として連載している米澤実江子氏の研究などが数少ない諸研究である。本研究会は、後には中下巻の読解の指針となるような研究の成果を学界に提出することも一つの目標である。

「近代戦争下の学術調査と人的交流」研究会

藤井由紀子

研究会メンバー：藤井由紀子、中川剛、花栄、日比野洋文

本年度、新たに「近代戦争下の学術調査の人的交流」研究会を立ち上げ、日本近代における戦争と学問との関係を具体的に考究する活動を開始した。きっかけは、四年前、日中戦争期に中国で学術調査を行った小川貫弌（龍谷大学名誉教授）という中国仏教史学者の残した資料と出会ったことにあるが、その後、科学研究費助成事業に採択され（「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫弌の記録より」、日本学術振興会学研究費・基盤研究C）、小川だけでなく、戦争下で学術調査に携わった研究者たちの記録の発掘に努める必要性が出てきたことが当該研究会の立ち上げにつながった。

近代戦争が国家国益をかけて行われる侵略行為である以上、占領先の情報を収集する目的で、研究者が現地に動員され、軍の全面的な支援をうけて学術調査を行い、その成果が軍部に蓄積されることは、戦時下ではむしろ当たり前のように行われていたとみてよい。研究者もまた時代に規定された歴史的な存在にすぎないのであり、近代の学問そのものが、こうした近代戦争と密接に結びつきながら発展してきた面のあることは、熟考しておかなければならない学史上の問題のひとつである。本格的な活動は来年度以降となるが、本研究会では資料を通して戦争と学問との関係にきちんと向き合い、その上で近代学問の客観性・実証性の質そのものを問い直してみたい、と考えている。

教行信証学習会

吉田　暁正

講　師　森村森鳳（張偉）先生
趣　旨　漢文として『教行信証』を読む
会　場　同朋学園Ｄｏプラザ閲蔵２Ｆ　多目的会議室
テキスト　東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）
開催日　５／30、６／27、７／25、９／26、10／31、11／28、１／23、２／27

『教行信証』の読解において、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。特に、親鸞の言語表現、文字への厳密さに注目して読むこと、また、その表現の中に込められている重層的な意味を読み取ることを意識しながら読解を進めている。

今年度は、「信巻」における「王舎城の悲劇」について学習を進めた。「信巻」では『涅槃経』によって王舎城の物語と阿闍世の姿が尋ねられているが、阿闍世の出生の因縁については、善導の『観経疏』も確認しつつ、その背景を確かめた。

親鸞が阿闍世の姿にどのような課題を見出したのか。「慚愧」という問いを確かめつつ、さらに学習を進めていきたい。

二〇一九年度彙報

《研究所構成メンバー》

所　長　安藤　弥

所　員　古川　桂（人文学科）　岩瀬　真寿美（社会福祉学科）
石牧　良浩（社会福祉学科）

所員・幹事　市野　智行（仏教学科）

研究顧問　小山　正文　玉井　威　小島　惠昭　蒲池　勢至

所員（非常勤）　千枝　大志　川口　淳

客員所員　青木　馨　飯田　真宏　塩谷　菊美　大山　誠一
大艸　啓　岡村　喜史　花　栄　北畠　知量
ギャナ・ラトナ　工藤　克洋　黒田　龍二
嘉木揚　凱朝　脊古　真哉　新野　和暢　武田　龍
服部　仁　藤井　由紀子　藤村　潔
ブレニナ・ユリア　松金　直美　吉田　暁正
吉田　一彦

客員研究員　川村　伸寛　周夏　高木　祐紀　中川　剛　松山　大

特別研究員　老泉　量　日比野　洋文

《所員会議》

4／8、5／7、6／18、7／16、10／1、11／12、12／3、12／17、1／15

《公開講座等》

・教行信証学習会
〔前掲〕
・現地で学ぶセミナー
第1回〔開催日〕7／6（土）〔講師〕脊古　真哉
「遠江国の宗教文化―静岡県周智郡森町・浜松市天竜区・北区―」
第2回〔開催日〕11／19（火）〔講師〕千枝　大志
「仏教文化からみた伊勢志摩―伊勢国（松坂・斎宮・宇治山田）の神仏交渉等の史的痕跡を求めて―」

《ギャラリー展示》（会場＝DOプラザ閲蔵1階ギャラリーDO）

・前期「空間にみる名古屋の寺院と城下町のカタチ」展
〔会期〕7／6～7／16
〔担当〕千枝　大志・川口　淳
※ギャラリートーク（7／8（月）・7／13（土）・7／15（月）各午後1時～）
・後期「法然」展
〔会期〕12／6～12／17
〔担当〕飯田　真宏・市野　智行・川口　淳・安藤　弥
※ギャラリートーク（12／7（土）午後4時～、12／14（土）午後1時～）

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査
4／19　真宗大谷派名古屋別院（愛知県名古屋市）＊継続調査
8／20～21　本誓寺（真宗大谷派　岩手県盛岡市）＊継続調査
3／8～10　本誓寺（真宗大谷派　岩手県盛岡市）＊継続調査
・寄託史料の整理調査
・学園史関係資料の再確認

《特別活動》

・（仮称）初期真宗研究会（開催日8／23、2／13　会場　知文会館）
・随時、研究所への学術的来訪・打診へ対応。